

第一回 論文読解 問題編

千葉県出題

出典・畠村洋太郎『組織を強くする 技術の伝え方』

*各形式段落の冒頭には、便宜上、段落番号を加筆してある。

次の①の文章を読み、あとの(1)～(6)の問い合わせに答えなさい。

① 茶道や武道の世界には、「守・破・離」という教えがあります。これはその人のレベルに応じて、それぞれの段階でどのようにことを実践すべきかを示したものです。三つの段階を簡単に説明しておくと、「守」は決まった作法や型を守る段階、次の「破」はその状態を破つて作法や型を自分なりに改良する段階、そして、最後の「離」は作法や型を離れて独自の世界を開く段階です。

② 一般的には、すべての学習は真似から始まります。手本に従つてAことを求められるのです。これがまさに「守」です。

③ 決められていることを生真面目に守るこの段階は、繰り返しも多く非常に面倒だし、なによりもやつているほうは面白くもなんともありません。そのためそこで我を通して自己流でいきたがる人がいます。しかし、自分の土台をつくるためには、素直に手本を真似るほうが結果として早く進歩することができます。

④ 実際、初期の段階で我慢して手本の真似を徹底的に繰り返していると、そのうちに手本と同じようにやることの意義や、手本から外れたときにはじるデメリットが理解できるようになります。ここまでくると「強制されて仕方なく守っている」というより、「自ら望んで守っている」という状態になります。やっていることの内容や価値を自分なりに理解し

ているので、自分の意思で率先して手本を守るようになるのです。

⑤ ところで、世の中にはこの状態で満足してしまう人がたくさんいます。そのような人は、当然のことながらそれ以上の進歩はありません。

⑥ 本当に楽しいのはここからです。この段階まで来た人は、自分で創意工夫をしながらいろいろなことが試せるようになります。内容を理解しているため、従来の方法よりもっとといい方法はないかと自分で探すことができるからで、そのような能力があるのに何もないのはもったいないことです。

⑦ そして、この状態がまさに作法や型を破る「破」の段階です。基本的には、作法や型を手に入れて、そこからさらに出ようと意識して行動した人だけが進歩を続けられるのです。もちろん、このときの試行錯誤はしつかりとした経験と根拠に基づくものなので、初心者があてずっぽうで行動するのとはまったく違います。決められた道から外れても、それによつて致命的な失敗を犯す危険性は極めて低いし、むしろこのときの行動はより効率的で合理的な方法の創出につながる可能性も大です。

⑧ 従来の作法や型を破るというのは、悪いことのように思えます。しかし、変化のあまりない業界ではともかく、現実の世界ではそのようにしなければいけない場面は意外にたくさんあります。

⑨ それは時代の変化とともに、周囲の条件の変化も必ず起こっているからです。こうした場合は従来の作法や型をそのまま使うことなど無理が生

じるわけですから、それに合わせて作法や型を変えていくのはむしろ当然といつてもいいでしょう。何より条件が変わっているのに従来の作法や型をそのまま使い続けているとのほうが、問題であり危険なことです。

10 いずれにしても、このような試行錯誤を何度も繰り返した人は、理解と経験に基づいてこれまでとはまったく別のものを自分の力で新たに生み出すことができます。これが最後の「離」の意味です。このレベルにある人は、従来の技術やシステムを常に効率よく運用できるだけではなく、制約条件の変化や外部からの新たな要求に合わせて全体をつくり変えることができます。それゆえ「離」に到達した人は「優れた創造力の持ち主」とされているのです。

(畠村洋太郎『組織を強くする 技術の伝え方』による。)

(1) I の文章中の A に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア それと似た手本を作る
イ それと同じようにする
ウ それを合理的に改める
エ それを学べる場を守る

(4) I の文章で、筆者は、どのような人を「離」に到達した人と考えているか。その例として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

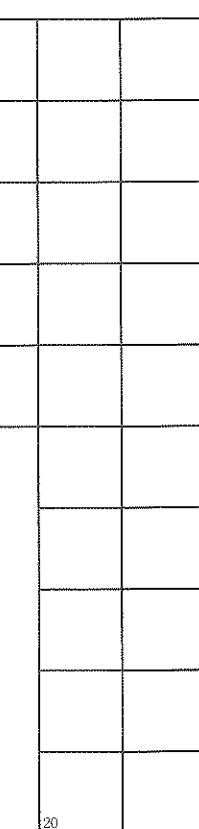
ア 古典作品で実績を積むとともに海外進出に成功し、伝統芸能の世界に新境地を開いた狂言の役者。
イ 明治時代より続く老舗のホテルを守るために、初心に戻つてホテル経営を基礎から学び直す社長。
ウ 和食界に革命を起そうとして板前の修業を中断し、アジアやヨーロッパを放浪している料理人。

(2) I の文章中に自分の土台をつくる とあるが、そのときに理解するところが具体的に述べられている部分を、文章中から三十字以上、四十字以内で抜き出して、はじめと終わりの五字をそれぞれ書きなさい。

(3) I の文章中の このような試行錯誤 の内容を示した次の文の A に入れる言葉を、文章中の言葉を用いて二十字以上、二十五字以内で書きなさい。

さい。

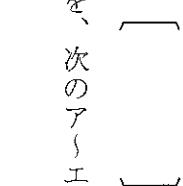
従来の作法や型から出ようと意識してもつと効率的で合理的な方法を自分で探す試みや、 A 試み。



20

(5) I の文章中の このような試行錯誤 の内容を示した次の文の A に入れる言葉を、文章中の言葉を用いて二十字以上、二十五字以内で書きなさい。

ア まず話題を端的に示し、説明をしたのちに課題を挙げている。
イ まず結論を示し、説明をしたのちに改めて結論を述べている。



- ウ 内容を一つずつ詳しく説明したのちに、全体をまとめている。
エ 全体像を示したのちに、内容を一つずつ詳しく説明している。

(6)次の文は、あとの^{II}の文章の内容を、^Iの文章の言葉を用いてまとめたものである。^①、^②に入る言葉を、^Iの文章中から抜き出して、それぞれ漢字一字で書きなさい。

^{II}の文章の筆者は、「^①」の段階の大切さを説くとともに、「^②」の意識を持つて「^①」の段階を過ごした」とを回想している。

どのようにすれば良い仕事にめぐりあえるのか。まず、好きな仕事、やりたい仕事ではないからと、最初から投げ出してはいけません。そういう意識を持たずに、まずはやるべきことに淡々と取り組むことが大切です。私も若いうちからそう心がけて働いてきましたが、その一方で仕事の内容を見て、旧態依然としたこのやり方でいいのか、単純に流れ作業をするだけでいいのか、私なりの新たな貢献はできないかななど、いろいろな角度から考えていました。

(北尾吉孝「学びは足りているか?」による。)

〔^①〕
〔^②〕

第1回 論文読解 解答解説編

出典・畠村洋太郎『組織を強くする 技術の伝え方』

千葉県出題

*各形式段落の冒頭には、便宜上、段落番号を加筆してある。

次のIの文章を読み、あと(1)~(6)の問い合わせに答えなさい。

I I

茶道や武道の世界には、「守・破・離」という教えがあります。

(実行)

はその人のレベルに応じて、それぞれの段階でどのようなことを実践すべきかを示したものです。三つの段階を簡単に説明しておくと、「守」

は決まった作法や型を守る段階、次の「破」はその状態を破って作法や型を自分なりに改良する段階、そして、最後の「離」は作法や型を離れて独自の世界を開く段階です。

2 一般的には、すべての学習は真似から始まります。手本に従つてAことを求められるのです。これがまさに「守」です。

→設問(1)の解説へ

←「破」←

5 ところで、世の中にはこの状態で満足してしまう人がたくさんいます。

〔守〕

そのような人は、当然のことながらそれ以上の進歩はありません。

6 本当に楽しいのはここからです。この段階まで来た人は、自分で創意工夫をしながらいろいろなことが試せるようになります。内容を理解しているため、従来の方法よりもっといい方法はないかと自分で探すこと

ができるからで、そのような能力があるのに何もしないのはもったいないことです。

7 そして、この状態がまさに作法や型を破る「破」の段階です。基本的には、作法や型を手に入れて、そこからさらに出ようと意識して行動した人だけが進歩を続けられるのです。もちろん、このときの試行錯誤はしっかりと経験と根拠に基づくものなので、初心者があてずっぽうで行動するのとはまったく違います。決められた道から外れても、それによって致命的な失敗を犯す危険性は極めて低いし、むしろこのときの行動はより効率的で合理的な方法の創出につながる可能性も大です。

8 従来の作法や型を破るというのは、悪いことのように思えます。しかし、変化のあまりない業界ではともかく、現実の世界ではそのようにしなければいけない場面は意外にたくさんあります。

→設問(2)の解説へ

9 「それは時代の変化とともに、周囲の条件の変化も必ず起こっているからです。」こうした場合は、従来の作法や型をそのまま使うことに無理が生じるわけですから、それに合わせて作法や型を変えていくのはむしろ当然といつてもいいでしょう。何より条件が変わっているのに従来の作法や型をそのまま使い続けていることのほうが、問題であり危険なことがあります。

10 「いずれにしても、このような試行錯誤を何度も繰り返した人は、理解と経験に基づいてこれまでとはまったく別のものを自分の力で新たに生み出すことができます。」これが最後の「離」の意味です。このレベルにある人は、従来の技術やシステムを常に効率よく運用できるだけでなく、制約条件の変化や外部からの新たな要求に合わせて全体をつくりえることもあります。それゆえ「離」に到達した人は「優れた創造力の持ち主」とされているのです。

(畠村洋太郎『組織を強くする 技術の伝え方』による)

→ 設問(3)(4)(5)(6)の解説へ

- (1) □の文章中の□に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。
「手本」
- イ ① それと似た手本を作る
ア ② それと似た手本を作れる
ウ ③ それと似た手本を作ること
エ ④ それを合理的に改める
それを学べる場を守る

正答
イ

(1) 解説

A 文と直前文で「学習」は、「手本に従って」どうする「ことを求められる」のかと問われている。直前文から「真似」であると理解できる。

て	わ	周	条件	の	変	に
い	せ	囲				
く	て	の				

(23字)
25

模範解答

(3) □の文章中の□に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

従来の作法や型から出ようと意識してもつと効率的で合理的な方法を自分で探す試みや、□試み。

正答
手本と同じ

デメリット

(2) □の文章中に自分の土台をつくるとあるが、そのときに理解するところが具体的に述べられている部分を、文章中から三十字以上、四十字以内で抜き出して、はじめと終わりの五字をそれぞれ書きなさい。

(2) 解説
傍線部一文から「自分の土台をつくる」とときは「素直に手本を真似」するときであることが判明し、直後文に「手本の真似の意義や手本以外のデメリットを理解できるように」なると指摘がある。

(1) □の文章中の□に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

（畠村洋太郎『組織を強くする 技術の伝え方』による）

(3) 解説

傍縁部一文と直後文から「このような試行錯誤を繰り返した人は「離」に達する」と読めるので、「このような試行錯誤」とは、「離」の前の段階「破」であると判明する。「破」の試行錯誤については⑦段落に一つ、⑨段落にもう一つが述べられている。

(4) ①の文章で、筆者は、どのような人を「離」に到達した人と考えていいるか。その例として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい

「従来の技術の運用」

ア 古典作品で実績を積むとともに海外進出に成功し、伝統芸能の世界

〔創造力〕
〔創造力〕

に新境地を開いた狂言の役者。

イ 明治時代より続く老舗のホテルを守るために、初心に戻つてホテル経営を基礎から学び直す社長。

ウ 和食界に革命を起こそうとして板前の修業を中断し、アジアやヨーロッパを放浪している料理人。

エ 新しい製品が次々と発売される中、地元客を大切にし伝統の味にこだわり続ける和菓子店の店主。

正答〔 ア 〕

(4) 解説

「離」に達した人は、⑩段落で「従来の技術やシステムを運用でき、：要求に合わせて全体をつくりえることのできる：創造力」のある人であると指摘されている。選択肢アにおいて、「古典作品で実績を積む」とは、従来の技術の運用のことであり、「新境地を開く」とは創造力のことである。

(5) ①の文章の構成を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エ

のうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア まず話題を端的に示し、説明をしたのちに課題を挙げている。

イ まず結論を示し、説明をしたのちに改めて結論を述べている。

ウ 内容を一つずつ詳しく説明したのちに、全体をまとめている。

エ 全体像を示したのちに、内容を一つずつ詳しく説明している。

(5) 解説

①段落で本文全体の主題である「守・破・離」が提起され、それが②段落から最終段落まで順に説明されているという構成である。

正答〔 エ 〕

(6) 次の文は、あの^{II}の文章の内容を、^Iの文章の言葉を用いてまとめたものである。^①、^②に入る言葉を、^Iの文章中から抜き出して、それぞれ漢字一字で書きなさい。

^{II}の文章の筆者は、「^①」の段階の大切さを説くとともに、「^②」の意識を持って「^①」の段階を過ごしたことを回想している。

^{II}のようにすれば良い仕事にめぐりあえるのか。まず、好きな仕事、やりたい仕事ではないからと、最初から投げ出してはいけません。そういう意識を持たずに、まずはやるべきことに淡々と取り組むことが大切です。私も若いうちからそう心がけて働いてきましたが、その一方で仕事の内容を見て、「旧態依然としたこのやり方でいいのか、単純に流れ作業をするだけでいいのか、私なりの新たな貢献はできないかなど、いろいろな角度から考えていました。

(北尾吉孝「学びは足りているか?」による。)

正答 ① 守 ② 破

(6) 解説

^{II}の文章では、「仕事とは、やるべきことに淡々と取り組む（「守」の状態）：一方で仕事内容についていろいろな角度から考えて「みる必要性（「破」の状態）がある」ということが述べられている。

論文読解の解法ポイント①

そもそも「論文」ってなんだろ?~

論文とは、特定の学問分野（科学・数学・物理・政治・心理・社会・言語・文化・思想…）において著者の選択した主題に関し、引用や証明を通じ自らの主張を論理的に構成した文章のことである。

隨筆や小説・詩歌などの芸術作品は、論拠に基づく論証を必要とせず、筆者の感じたままを述べてゆくもので、論文とは形式・内容ともに全く異なるものである。

論文は一般的に各文から構成された段落を単位として論理が進行する。段落の集合を「節」、節の集合を「章」、章の集合を「部」、部の集合を「表題」と呼称する。例えば、○○著『教育思潮史』第1部「近代西歐思想における教育論」第2章「ルソーの教育論」第1節「エーミールに見られる教育環境について」…というように。

論文とは、総じて、大学以上の高等教育機関・研究機関で研究成果の報告として作成された書面を指し、多くは大学のテキストとして使用される。一般には専門分野外の人々にも理解できるよう作成するというのが共通認識だが、現実的にその理解にいたるためには、各分野の専門知識と読解技術が必要とされる。よってみなさんのような中学生からこうして基本を学ぶ必要があるわけである。

ちなみに、高校入試に扱われる文章は、数十数百ページにわたる論文一冊から、ほんの数ページを抜粋して出題されている。